

『三四郎』とバイロン

Junko Higasa 2014.6.10

結婚前の美禰子と三四郎の美術鑑賞のシーンに、ヴェニスが出てくる。ふとその時ターナーを思い出した。漱石といえばターナー、ターナーといえばバイロン。漱石が観たかもしれないといわれるターナー(J.M.W.Turner)の画のタイトルは『Childe Harold's Pilgrimage(貴公子ハロルドの巡礼の旅)』だ。それはそのままジョージ・ゴードン・バイロン(George Gordon Byron 1788.1.22~1824.4.19)の詩のタイトルである。バイロンを好んだ画家が、その詩と自分の画を組み合わせた一作だ。

その詩の中にヴェニスが出て来る。その中でバイロンは、人を惹きつけて止まない天賦の才能を持ったヴェニスに、統治の変遷により、かつての栄光を失ったことを嘆いている。

そのヴェニスは美禰子に当てはまるように思う。無意識に男を惹きつける天賦の才能を持った美禰子は、誰が夫になるかで、輝きもするし、亡びもする。全ては統治者次第なのである。「彼女」と表されるヴェニスに個の自由がなかったように、美禰子もまた自分の意に沿った人生を選ぶことが出来なかった。

バイロンは詩に詠う、輝きを失ったヴェニスを。それは高い雲を目指し、自ら社会へ飛び出そうとする美禰子が、過去の罪を集結させた「ため息橋」を抱えながら、与えられた結婚の中で、嘆きの翼を大きく広げて、寂しく微笑む光景のように見える。